論文要旨

本論文は、「どこで心が終わり、残りの世界が始まるのか」、という「心の境界」の問題を扱う。この問題に対しては、心の哲学・認知科学のいずれにおいても、デカルトを歴史上の代表的な提唱者とする、われわれ人間的行為者の心はその生物体の内部、特に頭の中にある、という内在主義の教説が主流の位置を占めてきた。しかし 1,990 年代半ば頃から、われわれの心は皮膚と頭蓋の境界を越えて環境にまで広がっている、と主張する〈拡張した心〉テーゼが複数の論者によって提唱され、認知科学と心の哲学の二つの分野を中心に広い領域で大きな話題を呼んでいる。本論文では特にこの〈拡張した心〉テーゼを検討し、これを斥けて、デカルト的な内在主義を擁護する。

心の境界の問題は特に、われわれの認知において身体・環境が演じる役割を重視する「身体的・状況的認知観」の基礎を問う、という科学方法論的問題としての意義と、心の物理的基盤を脳と見なす現代の標準的物理主義に対する再考を促す、という形而上学的問題としての意義をもつものとして注目されてきた。しかし本論文では、これに加えて、心の境界の問題とは人間本性を巡る問題である、と提案する。その根拠は、一つには〈拡張した心〉が「人間とは何か」を解明することをその最大の目的の一つとしてきた認知科学への反省を機縁として提唱されたテーゼだからである。もう一つには、〈拡張した心〉には様々なバージョンがあり、それらは「反デカルト主義」という点で一致しているかに見えるが、実際には対極とも言える人間観をもっているからである。彼らの主張を吟味するに当たっては、その背後にある、心や認知の主体に当たるわれわれ自身の本性についての見方を、徹底して問い質すことが重要だと言えよう。

本論文では〈拡張した心〉を以下の三つのバージョンに分類し、独立に反論を加える。

(1) 従来の表象主義的認知観に対する代案として、認知システムを力学系と見なす「力学系的認知観」を提唱し、それに基づいて認知プロセスが環境に広がっている、と主張するティム・ヴァン・ゲルダー、アンソニー・チェメロらの「過激派〈拡張した認知〉」。

(2) 従来の表象主義的認知観の枠内に留まりつつ、認知プロセスおよび信念が環境に広がっている、と主張するアンディ・クラークとデイヴィッド・チャルマーズ、ロバート・ウィルソンらの「穏健派〈拡張した認知〉」(「拡張した心」という用語は狭義でこの立場を指すものとして用いられており、本論文でもしばしばこの慣例に従う)。

(3) 知覚と行為の密接な結びつきを強調する「エナクティヴィズム」という知覚観に依拠して、意識経験が環境に広がっている、と主張するフランシスコ・ヴァレラ、エヴァン・

トンプソン、アルヴァ・ノエ、スーザン・ハーリーらの「〈拡張した意識〉」。

以下では、各章の議論を要約する。

第 1 章「背景――内在主義と外在主義――」では、心の境界を巡る議論を内在主義／外在主義という軸に沿って整理し、議論の背景を設定する。まず、本論文で使用される用語を解説しつつ〈拡張した心〉テーゼの性格について触れた後、〈拡張した心〉を「媒体外在主義」（ある人の心的状態の内容の媒体が部分的にその人の環境内に位置している、というテーゼ）として位置づける。これによって、〈拡張した心〉と、しばしばそれと混同されてきた「内容外在主義」（ある人の心的状態の内容がその人の環境内の対象や出来事に依存して個別化される、というテーゼ）や「素朴実在論」（ある人の知覚経験がその人の環境内の知覚対象によって構成されている、というテーゼ）との相違が明らかになる。次いで、媒体内在主義の論拠として従来引き合いに出されてきた「水槽の中の脳」の思考実験と認知科学の「古典的計算主義」仮説を紹介する。この際、「水槽の中の脳」が内在主義の論拠とならず、むしろ脳の神秘化につながることを示す。さらに、古典的計算主義に対するカウンタームーブメントとして生じてきた身体的・状況的認知観について解説する。身体的・状況的認知観とは、われわれの知的行動が脳、身体、環境の相互作用から生じるのであり、身体や環境が認知において重要な役割を担っている、ということを強調する見方である。しかし、身体的・状況的認知観の内部でも、認知が環境内の対象や出来事によって構成されるのか、それらに単に因果的に依存するにすぎないのか、については意見が分かれる。さらに、前者の見解を採用する〈拡張した心〉（この文脈では〈拡張した認知〉と呼ばれる方が多い）論者の間でも、従来の表象主義的な認知観を維持する穏健派と、これを放棄する過激派が存在する。以下の各章の議論は、ここで与えた立場の分類に沿って進められる。

第 2 章「力学系的認知観と〈拡張した認知〉」では、ヴァン・ゲルダーやチェメロが提唱した過激派〈拡張した認知〉を検討し、これを斥ける。彼らは、力学系理論という数学的ツールを認知科学の説明枠組みとして導入する「力学系アプローチ（DSA）」に依拠して、認知観の転換を図る。彼らが擁護する力学系的認知観では、従来の表象主義的認知観と異なり、行為者と環境との相互作用は、表象に対する操作を介した認知システムへの入力／認知システムからの出力ではなく、認知システムの構成要素間のカップリングと捉えられる。しかし筆者は、力学系的認知観を吟味し、以下の二つの論点を挙げて、これが擁護不可能であると論じる。第一に、彼らが提案する反表象主義は、人間的行為者の知能の本質的部分について多くを教えない。筆者の見解では、人間に見られるような知的行動を説明するには表象主義的な枠組みを採用することが最良であり、DSA は従来の表象主義的アプローチと競合するのではなくむしろそれを補完するものである。第二に、力学系的認知論

者たちはその〈拡張した認知〉の論証において「認知システム」という概念を恣意的に再定義しているが、この際に彼らは従来の認知理論の説明目的を不当に無視している。従来の認知理論は知的行動を認知能力という観点から説明することを目的としており、このような説明において「認知システム」は認知能力の実現基盤という役割を負わされてきたのである。以上の点を考慮すれば、力学系的認知論者たちが採用する「認知システム」の定義および彼らが提案する認知観の転換は受け容れられず、従って認知が環境に広がっているということは帰結しない。

第 3 章から第 5 章では、クラークとチャルマーズおよびウィルソンが提示した穏健派〈拡張した認知〉（ないし狭義の〈拡張した心〉）を検討する。

まず第 3 章「〈拡張した心〉の論証」では、計算主義に依拠するウィルソンの論証と、機能主義に依拠するクラークとチャルマーズの論証を紹介する。ウィルソンは、「筆算」を例に挙げて知的行動を生み出す計算システムそのものが環境に広がっている場合があることを指摘し、（計算主義者が言うように）われわれの認知システムが計算システムだとしてもわれわれの認知プロセスが常に頭の中で生じるわけではない、と論じる。また、クラークとチャルマーズは、内的生物学的記憶の代わりにメモ帳を用いて行為する「オットー」という想像上の行為者を例に挙げ、ある種の機能主義に依拠して、オットーの信念が部分的にメモ帳によって構成されている、と論じる。さらにこの章では、穏健派〈拡張した認知〉の代表的な提唱者であるクラークの人間観を詳しく紹介する。クラークによれば、われわれ個々の人間的行為者は、環境内の技術的リソースを自分の一部として取り込んでいくような、「生まれながらのサイボーグ」だとされる。

次に、第 4 章「〈拡張した心〉論争」では、特に、穏健派〈拡張した認知〉の主要な論拠とされるクラークとチャルマーズの論証を巡って、これまでに展開されてきた論争に関する網羅的なサーベイを行う。ここでは、拡張したプロセスは「認知現象の印」（あるプロセスを認知プロセスたらしめる条件）を充たすか、機能主義に依拠するクラークらの論証の成否、認知科学の研究方法として〈拡張した認知〉を採用することの利点、〈拡張した認知〉が倫理学や認識論に対してもつ含意、といった論点を検討し、それぞれについて筆者自身の見解を述べる。この過程で筆者は、なぜこの論争がクラークらのオリジナル論文の発表から 15 年の歳月を経ても収拾の気配を示していないほどに混乱してきたのか、を解き明かす。混乱の原因は、クラークらの論証において、「拡張した心的状態・プロセスの主体は誰であり、どんな存在者なのか」、ということが曖昧にされている、という一点にある。この事実を示すことを通して、次章で筆者独自の反論を提示するための準備を整える。

第 5 章「〈拡張した心〉への反論」では、穏健派〈拡張した認知〉に対する反論を行う。

ここでは、心の哲学、認知科学方法論、人間観の三点において反論を展開する。まず心の哲学に関しては、クラークらの論証において、(「オットー」という）登場人物の名前が暗黙裡に二義的に用いられており、その名前で指されている二人の行為者を区別すれば誰の心も広がっていないことが判明する、ということを示す。次に「筆算」の事例を取り上げて、認知科学の方法論に関する考察を行う。まず、この文脈でしばしば混同されてきた「拡張した認知仮説」と「社会的分散認知理論」という二つのテーゼを区別する。前者はクラークらが提唱する「個人の認知プロセスがその環境に広がっている場合がある」というテーゼであり、後者は認知人類学者エドウィン・ハッチンズが提唱する「拡張した認知プロセスが存在するが、それは個人の認知プロセスではなく、人間の集団または人間と道具から成る社会文化的システムの認知プロセスである」というテーゼである。そして、「拡張した認知仮説」を認知科学の研究戦略として採用することには何らの利点もなく、むしろ「社会的分散認知理論」を採用すべきだと提案する。最後に、クラークの人間観を批判し、筆者自身の代案を提示する。筆者の提案は以下のものである。クラークの人間観は、強力な認知能力をもつという理由で人間を他の動物と別種の存在者と見なしたデカルトを踏襲するものであり、受け容れられない。人間の知的特性とは、自分自身の認知システムを拡張させることにではなく、他者や道具と共同で社会文化的な認知システムを形成することにある。以上三つの議論によって、クラークら穏健派〈拡張した認知〉を全面的に斥ける。

第 6 章「エナクティヴィズムと〈拡張した意識〉」では、知覚経験を行為と密接に結び付いたものと捉える「エナクティヴィズム」に依拠するヴァレラ、トンプソン、ノエ、ハーリーらの〈拡張した意識〉を検討する。筆者は、彼らが依拠するエナクティヴィズムの知覚観と、〈拡張した意識〉を導き出す議論の両方に対して異議を唱える。まず、エナクティヴィズムの知覚観に対して、二つの反論を提示する。第一に、エナクティヴィズムのテーゼそのものが、反例の存在によって経験的に偽になるか、標準的な知覚理論と変わらないトリビアルなものになるか、いずれかである。第二に、エナクティヴィズムの論証は、その提唱者たちが挙げるすべての事例について解釈を誤っており、また因果関係と構成関係を混同する論理的錯誤に陥っている。次に、〈拡張した意識〉の二つの主要な議論――「変化盲」という経験的事例の存在に基づくノエの議論と、脳 - 身体 - 環境間の複雑なカップリングの存在に基づくトンプソンとヴァレラおよびハーリーの議論――がいずれも成功していないことを示す。第一に、彼らが挙げる事実はいずれも、意識経験が環境内の出来事によって構成される、とする論拠としては論理的に不十分である。第二に、ノエの議論は、変化盲の事例に関する解釈そのものに疑いがある。第三に、トンプソンらやハーリーの議論は、脳が脳 - 身体 - 環境システム全体の中でも特異なダイナミクスをもつという事実を

考慮に入れていない。こうして筆者は、意識が環境に広がっていると考える理由が何もないことを明らかにする。

結論では、ここまでの議論を振り返りつつ、われわれの心は環境に広がっておらず、少なくとも皮膚が、そしておそらくは頭蓋が、われわれの心と世界の間の境界を成す、と論じる。ここで筆者は、〈拡張した心〉の動機そのものを批判する。〈拡張した心〉論者たちがその動機とするところの、デカルト的内在主義に対する二つの懸念――脳を謎めいた物質と見なす誤りと、身体や環境の役割を軽視する誤りのそれぞれに対する懸念――はいずれも問題ではない。まず、われわれの心が環境に広がらない理由は、ダイナミクスや機能的組織化の観点から理解できるのであり、内在主義を採っても脳を神秘化することにはならない。また、知的行動の産出における身体と環境の役割を評価するには、われわれの認知が身体的相互作用を介して環境に大きく依存することを認めればよく、それが環境に広がっていることを認める必要はない。さらに筆者は、〈拡張した心〉が誤った人間観に帰着するものである、ということを再確認する。すなわち、一方で過激派〈拡張した認知〉は（反表象主義を採用することで）われわれの行動を知的たらしめるものを無視する誤り、他方で穏健派〈拡張した認知〉はわれわれの認知能力を過大評価する誤りにつながるのである。以上の議論を通して筆者は、改めてデカルト的内在主義を擁護することの正当性を訴える。